「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」考

江口正弘

(一) はじめに

伊勢物語の第四段に

……又のとしのむ月にむめの花さかりにこそをこひていきてたちて見ゐて見ゝれとこそににるへくもあらす　うちなきてあはらなるいたしきに月のかたふくまてふせりてこそを思いてゝよめる

月やあらぬ春や昔のはるならぬ
わか身ひとつはもとの身にして

（御所本伊勢物語）注1

という歌がある。古今集の恋五に業平の歌としてあるのを始め、他の作品にも何度もとられている有名な歌であるが、古来「月や」「春や」の「や」が疑問を表わすのか、反語を表わすのかで、解釈が分かれている。

「や」を反語として、「月も春も皆昔のままなのに、唯わが身一つは、昔の身であって、しかもそのめざす人がいないからすっかり変り果てたよ」と仮に解くが、古来さまざまの説があって定めがたい。（松尾聡　校註伊勢物語　笠間書院）

という具合である。

この歌を考察するにあたって、次のような観点が考えられる。

一、詞書との関連から、どんな感懐を述べた歌と考えるべきか。

二、「や」に疑問と反語の意味のある事は言うまでもないが、この歌が作られた当時は、少くとも現在我々が感じている程まぎらわしい表現ではなかったと思われる。とすると語法上どちらが適切か。

三、「月やあらぬ」の「あり」は存在を表わす「あり」ではない。とするとこの「あり」はどう理解すべきか。

というようなことが問題となろう。

(二) 諸説について

ではこの歌について、諸家はどのような解釈をしているか。今管見に入った数種について検討してみる。伊勢物語の場合と、古今集の場合とで異なった解釈をとるべき理由（詞書などによる歌の解釈の相違）はないと思われるので、この二つの作品における諸注をながめてみよう。

A正徹物語（一四五〇年頃）

月があらぬか、春がもとの春であらぬか、我身ひとつはもとの身にして、こよひ逢ひつる人こそなけれといひたる也

注釈書ではないが、右のような解説がある。

「や」は疑問の意と解していると思われる。

B伊勢物語愚見抄（一条兼良・一四六〇）

月も昔の月にてはなきか、春も昔の春にてはなきかこぞみしをりの様にもなくよろづかはりはてたる心ちのするはいかにぞや。さるかとおもへば我身ひとつはもとのまゝにてありとよめり。

C伊勢物語直解（三条西実隆一五二二）

月やあらぬとは月をとがめて月はこぞの月にてはなきか春はむかしの春にてはなきかとはるをもとがめて更に去年にざるはなにとしたることぞと云心なり

右二者B・Cはともに「や」は疑問の意に解してあるとみるべきであろう。

D勢語臆断（契沖　一六九二）

我身一つは猶うしと思ひつゝありしまゝの身にて月やはおもしろかりしこぞの月ならぬ、春やはおもしろかりしこぞの春ならぬ、梅の花ざかりおぼろ月夜さながらありしまゝにて、こぞに似るべくもあらぬものゆゑなにぞやとふかくとがめてよめるにや

契沖は反語として解釈している。

E伊勢物語古意（賀茂真淵　一七五八）

月も且見ながらむかしの月にあらぬはとおぼえ梅もかつ見ながら去年見し春の花にやあらざるかと思はるゝ故に、立て見出て見よく見ればすべて去年に似ぬ也。さらば我身はいかにとおもひめぐらすに我身ばかりはもとの身のまゝにてここに来て在

真渕は疑問の意として解釈している。

F伊勢物語新釈（藤井高尚　一八一八刊）

此歌の解師説にまづ二つのやもじはやはてふ心にて月も春も去年にかはらざるよしなり。さて一首の意は月やは昔の月にあらぬ月もむかしのまゝの月なり。春やは昔の春にあらざる、春もむかしのまゝの春なり。然るにただ身ひとつのみは本の昔のまゝの身ながら昔のやうにもあらぬよとよめる也。

G考証伊勢物語詳解（鎌田正憲大正八刊）

今宵ここに来てみれば月やは昔の月にあらぬ春やは昔の春ならぬ春のけしきも月の光も梅の花も皆去年のまゝにてすべてたがへることはなきに只我身一つは去年のまゝの身にしてありながら去年まで逢ひし人にはあはずしてかくたがへる身の上となりしを思へばあはれ去年の春の恋しきよ

右のFGともに反語としての解釈である。

H伊勢物語私記（折口信夫　昭和五刊）

月はむかしのまゝの月でなかろうか、昔のままだ。春も亦さうだ。ところが人事は違ってゐる。自分の身一つはもとの境遇であって、あの人の境遇はもとと変って了ったことだ。

I通解伊勢物語（塚本哲三　昭和二七刊）

……月も春も昔のまゝで少しも変りはないのに、この身一つはもとの身でありながらもとの身でもないようになってしまった。

J伊勢物語評釈（窪田空穂　昭和三〇刊）

月が昔の月でないというのか、去年の通りではないか。花が昔の花ではないというのか、昔のまゝであり、かわりやすい人間の自分だけは以前のとおりであって。

HIJはともに「や」は反語と解している。

K日本古典全書　伊勢物語（南波浩）

月も春も昔のままのものではないのであろうか。恋しい人の姿の

見えぬ今はすっかり去年のながめと感じを変えてしまった。だが私だけは昔のままの身であるのに。

L月本古典文学大系伊勢物語（大津・築島）月も春も皆昔のままなのに、恋しい人だけは昔と違って今は逢えない。それに引きかえて自分の身だけは昔と変らず今ここに在る。昔が恋しいの意か。

Kは疑問、Lは反語に解している。

以上伊勢物語のうち管見に入ったもののうち、おもなものを示したのであるが、「や」については、右に示したように契沖あたりから反語の解釈をとるものが多いようである。

古今集の諸注については、書名と疑問、反語の別だけを示すと次のようである。

M古今余材抄　（契沖　一六九二成）　反語
N古今和歌集打聴（真淵　一七八九刊）　疑問
O　同　遠鏡　（本居宣長　一七九七刊）　反語
P　同　正義　（香川景樹　一八三二成）　疑問
Q　同　評釈　（金子元臣　昭和新版）　反語
R　同　評釈　（窪田空穂　昭和二〇）　反語
S日本古典文学大系（佐伯梅友）　疑問
T日本古典文学全集（小沢正夫）　疑問

以上伊勢物語と古今集の諸家の注釈をみると確かに疑問と反語が相なかばして、一応「定めがたい」ようにもみえる。然しこの歌は果たして〝心あまりて詞足りぬ〟表現なのであろうか。なお細かく検討してみよう。

(三) 語法上から

そこでまず語法上「や」はどう解するのが適当であるかの問題である。

「や・か」について論じられたものには、「萬葉集の助詞二種」（佐伯梅友博士著萬葉語研究所収）「国語助詞の研究」（此島正年博士著）や、「助詞助動詞詳説」（松村明博士編）などがあって細かく論じられてはいるが、これらは主として「や」と「か」の用法の違いなどを中心に論じられていて、今ここで問題とする古今集などにおける「や」の疑問と反語の用法という点については、殆ど触れられていない。

そこで今、古今集をとりあげて、その中に用いられている助詞「や」について考察してみることにする。

日本古典文学大系本の古今和歌集によって疑問、反語を表わすと考えられる「や」を調査すると一八一例を数えることができる。（この場合「やは」とあるものは除く）ただその中はなお細かに考察することができ、鶯の笠にぬふてふ梅花折りてかざさむ老かくるや と（36）

のように文末にあって（すなわち終助詞）疑問を表わす例が一一例。同じく終助詞としての用法であるが、

秋なれば山とよむまでなくしかに我おとらめやひとりぬる夜は（582）

のように「めや」「らめや」のように已然形に「や」がついて、反語を表わすもの一二例。「思ひきや」のように「きや」の形で「や」が反語を表わすもの二例。すなわち終助詞用法で反語を示すものが一四例あって、疑問、反語をあわせて終助詞用法二五例あることになる。今この終助詞用法をA類とする。

次は古典文学大系「古今和歌集」の解説で、佐伯博士が「なれや」として説かれている「や」がある。

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心一つを定めかねつる(509)

これは「なればや」の意とし、疑問「や」の結びは「つる」であるとするのが普通である。ただこの型の「や」では、(679)のように「〜なれや——べらなり」「〜玉なれや——くもの系すぢ」(225)というような型があって「や」の意味についても考えなければならぬ点があるのは佐伯博士の解説に説かれているとおりなので、ここでは改めてこの点を論じる事はせず、ただこの「〜なれや——」の型の「や」をB類とする。そしてこのB類の頻度を調べると一九回用いられている。

古今集に用いられている「や」の一八一回の中からA類の二五、B類の一九、計四四回は、ここで論じる「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」の型—今この類をC類とする—とは、明らかに型が異なるからこれを除くと、C類は一三七回ということになる。そこで古今におけるこの類の一三七回の「や」を調査してみると、まず結びの語とその頻度数は表1のとおりである。もっとも非活用語、例えば「いづこ」「なぞ」などは正確には結びとはいえないのであるが、「や」を含む文節をそれらが受けているとみるために示したものである。

表1

結びの語	度数
ん	40
らん	41
まし	4
り（る）	2
けん	6
き（し）	4
ず（ぬ）	5
ぬ（ぬる）	2
べし（べき）	1
いづこ	1
なぞ	1
いづら	1
誰	2
形容詞	11
動詞	14
体言	1
（省略）	1
計	137

このように結びについては「ん」「らん」のほか多くの語が用いられているが、結びの語によって疑問、反語の区別というものはもちろんない。というよりこれらC類の「や」は殆どその意味は「疑問」として用いられている。

C類の「や」を含む歌を一つ一つ検討してみると、そのほとんどは疑問の意に用いられていて、反語と解すべきだと思われる歌は三首だけであった。一首一首について検討する紙数もないので、まず反語の三例だけ示すと、

見てのみや人にかたらむさくら花てごとに折りていへづとにせん(55)

うゑし時花まちどほにありしきくうつろふ秋にあはむとやみし(271)

あきのたのほのうへをてらすいなづまの光のまにも我やわするゝ(548)

右の三首である。このほか(444)と(685)の歌の「や」を反語とみる解釈もあろうかと思うが、私はこれは疑問とみるべきだと思う。

いづれにしても一三〇余首の中で反語の例は三首程度なのである。これが、このC類の表現形式における「や」の意味の調査結果である。（「已然形＋や」の形との違いなどについては今は触れない。）とすると、「月やあらぬ」の「や」は疑問とみる方が語法上妥当性が強いということになる。

(四) 詞書きとの関連から

この歌は長い詞書きがついているから、まずそれに矛盾しない解釈

でなければならない。ところが反語と解釈すると、次のような矛盾が考えられる。反語の解釈(1)として考えられるのは、その骨組みだけで考えると、

(1)月も春も昔のままである。私の身一つはもとのままで（ある）。

となる。これでは上の句と下の句は「身一つ」という点で矛盾する。そこで下句には裏の表現があるとして、

(2)月も春も昔のままである。私の身一つはもとのままで（もとのままでない）。

とする。反語説をとる人は殆どこの考え方であるようである。この(2)の解は、一首としては上下矛盾ということはないが、詞書きとあわせて検討すると論理がたたなくなるようである。伊勢物語の

立ちて見、ゐて見見れど、去年に似るべくもあらず

では、歌の作者業平は、去年と同じ様子である事を求め期待して（「去年を恋ひて」の「恋ふ」は、眼前にないものを慕い求めるのにいう）やって来て、立ったり坐ったりして、去年と同じものを求めて）見るが、あたりの様子は「あばらなる板敷」で例示されているように、去年とはまるで違っていたのである。「立ちて見、居て見見れど」とは、あくまで視覚によって去年と同じものを求めようとしているのである。「去年に似るべくもあらず」は、従って客観的情景が去年とうって変っていたのである。それは「西の対に住む人」（二条后）がいないせいでもあろう。いずれにせよ「去年」を慕い求めて出かけて行った業平はそこで「去年」の片鱗さえ見出し得なかったのである。「去年に似るべくもあらず」とは、このように考えるべきであると思う。

反語説では「わが身だけは——もとのままでない」ということになるから、この考え方は詞書きと明らかに矛盾することになる。

従って「や」はやはり疑問と考えなくてはならない。いや反語が駄目だから疑問というのではなくて、本来ここは疑問でなければならない。

去年を恋ひ求め、その片鱗さえ見出し得なかった作者は、今度は最も変る可能性のすくない「月」と「春」とに眼を転じるのである。

恋しい人が居なくなって、今は全く去年を思い出す何物もなくなってしまったながめだが、一体月は昔のままの月ではないのか。春は昔のままの春ではないのだろうか。

というのが、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」の意図した表現であろうと思うのである。

(五) 「あらぬ」の解釈

「月やあらぬ」の「あり」について語法上の解説を加えたものは余りない。もっとも「月や昔の春ならぬ」の意と説いたものはあるが、それを語法上解説したものは見当らない。私も「月や昔の春ならぬ」の意だと考えるのであるが、そう理解する理由を語法の面から述べてみよう。

この「あらぬ」について佐伯博士は独自の解釈をなされている。[注2] 「あらぬ」は「あらぬ月」の意に見るとされ、「違う月」と口語訳されている。「ありつる」という表現に対し「あらぬ」という形が、「別ノ（モノ）、違ッタ（モノ）」の意に用いられるのは散文でしばしばでくわす表現である。ただ博士のように「月は違う月なのか」という意味では「月やあらぬ月なる」あるいは「月やあらぬなる

」とあるべきであると考えられる点（すなわち「ぬ」は結びなのか、準体法なのかの点）に問題が残る。ただ傾聴すべき見解である。

ところで「あり」は意味の上から大体四通りに分けることができる。(1)存在　(2)表現　(3)経過継続　(4)判断　の四通りである。

(1)存在は、アル、イル、生存スル、生活スル　の意味に用いるもので用例を示すまでもなかろう。

(2)表現は、「『いま明日明後日のほどにも』などあるにまことには思はねど」（蜻蛉中）のように「とある・などある」と引用をうけてト言ウ・ト書イテアル　の意に用いたもの。

(3)経過、継続は、「今幾日ありて若菜つみてん」（古今19）のように、時間の経過などを表わすものである。

(4)判断は「美しくあらず」のように判断の内容を示すのが普通であるが、中には判断の内容を文脈にあずける用法もある。

「あり」の用法は大体右のように考えられるが、この「春やあらぬ」の「あり」は、(4)の判断を表わすもので、しかもその内容を文脈にあずける用法であると思う。従って以下このような「あり」について簡略に述べてみる。[注3]

(ア) 今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを（古今889）

(イ) 思ひ出でて忍ぶ人あらむほどこそあらめ、そもまたほどなく失せて聞き伝ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ（徒然三十段）

(ウ) 三条院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせさせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮のやうにもなく（大鏡）

(ア)の「あれ」は「今ハオチブレテイルケレド」の意味で「さかゆく」の反対の意味。(イ)の「あらめ」は「あはれト思ウダロウガ」の意味。(ウ)の「あれ」は「よのつねの東宮ノヨウデアッタガ」の意味で、おのおの波傍線の部分と反対の意味を「あり」が表現している。

(エ) わが身にあやまつ事はなけれども、すてられたてまつるだにあるに、座敷をさへさげらるることの心うさよ。（平家一）

では「だにある」の形で「心うさよ」の意に近い意味が含められていると思われる。又

(オ) ひと所だにあるに、また前駆うち追はせて、おなじ直衣の人まゐり給ひて（枕草子、大系二三三頁）

では、文面には出ていないが、文脈から「オ一人イラッシャルノデサエハズカシイノニ」の意味である。

このように文脈によってその内容が判断できる場合は、「あり」だけを表現してその内容を示さない事があるのは、右の五例以外にも多く例を見出しうる。二、三例文だけを示すと、

(カ) 雪とのみふるだにあるをさくら花いかに散れとか風の吹くらむ（古今86）

(キ) 世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き（蜻蛉上）

(ク) 「人の思ひ侍らん事の、恥づかしきになむ、え聞えさすまじき」とうらもなく言ふ。「なべて、人に知らせばこそあらめ。この小さき上人などにつたへ聞えむ。けしきもなくもてなし給へ」（源氏　空蟬）

これらはすべて判断の内容を文脈にあずけて「あり」と表現した

ものである。

従って「月やあらむ」の「あり」も、すぐ「春や昔の春ならぬ」と続く文脈から「あり」の内容は「昔の月ならむ」の意味だと理解させる表現であると思うのである。

(六) むすび

以上みてきたところをまとめて「むすび」とすると、

(1) 「月やあらぬ春や……」の「や」は、古今集全体からみて、このような「〜や〜連体形」の「や」は疑問の意味が断然多く、反語の例は非常に乏しいから疑問を解すべきである。

(2) 反語と解すると「吾が身一つがもとの身でない」ということになって詞書きと矛盾する。

(3) 「月やあらぬ」の「あり」は判断の内容を文脈にあずけた用法で、「月や昔の月ならぬ」の意味である。

となる。試みに一首を通釈してみると、

(去年あの人と過ごした思い出の所へ来てみると、あの人がいなくなって、今はもうすっかり去年と感じをかえ、去年を思い出す何物もなくなっている。ああ今照っている)月も去年のままの月ではないのではないか。(この梅の花ざかりの)春さえ去年のままの春ではないのではないか。(ただ)私の身一つだけは去年のままの身なのだが。

とでもなるものと思う。

注1　天福本系統の本文だが、この歌についての異文はまだ管見に入っていない。

2　日本古典文学大系　古今和歌集

3　これらの「あり」については

佐伯梅友氏「みちのくはいづくはあれど」(万葉語研究所収)

拙稿「こそあれ考」(国語学55)

西尾光雄「『あり』という言葉について」(橋本博士還暦記念国語学論集)

などがある。

4　文献目録によると本稿と同じテーマを論じたと思われるものに、左のような論考があるが、ともに未見。

「月やあらぬ」考　谷鼎　短歌研究　昭14・11

「月やあらぬ」の歌について　山崎良幸　日本文学研究　昭26・10